

令和 6 年 6 月 8 日現在

機関番号：3 2 6 7 5

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：2 0 K 1 2 7 7 9

研究課題名（和文）自然本性概念を通じた後期デカルト哲学の統合的解釈モデルの構築

研究課題名（英文）Construction of a synthetic model for interpreting the philosophy of the late Descartes through the concept of nature

研究代表者

佐藤 真人（Sato, Masato）

法政大学・文学部・准教授

研究者番号：9 0 8 3 9 2 1 8

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000 円

研究成果の概要（和文）：後期デカルト哲学における自然本性概念の現れを次の点から分析・解明した。1）認識論からの分析。精神のうちにある自然本性的な認識方法として、『規則論』以来デカルトが使用する類比を自身の形而上学の論証（神が自己の原因であること）に適用したこと。2）神学と自然学からの分析。化体によってパンがキリストの身体に聖変化した後も、パンの「表面」の残存により、われわれにはパンとして感覚認識できることが、デカルト自然学によって論証可能であること。3）人間学からの分析。デカルトにとって精神的な愛と情念の愛はトマス・アクィナスのように区別されず、心身合一としての「私」の自然本性に固有の同じ一つの愛であること。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義として以下が挙げられる。1）前期デカルト哲学では生得的な真理による認識方法として、基礎づけと自然学解明のために用いられた自然本性概念が、後期には神学や人間学にまで拡大適用されていることを示した。

2）認識論から形而上学・自然学・神学・人間学を含む広範囲なデカルト哲学において、神によって与えられた自然本性という鍵概念が一貫して見出され、一つの横断的連鎖を成して体系構築に寄与していることを示した。

3）デカルトは晩年まで多様な角度から自然本性について考察、ないし自然本性概念を基に問題を考察していたことを明らかにし、西洋自然思想史におけるデカルトの位置づけを再考するための基点を示した。

研究成果の概要（英文）：The emergence of the concept of nature in late Cartesian philosophy is analysed and clarified from the following points: 1) Analysis from epistemology. The application of the analogy used by Descartes since the Rules of direction of the mind to his metaphysical argument (that God is the cause of the self) as a natural method of recognition in the mind.

2) Analysis from theology and physics. Descartes' physics can show that even after the transubstantiation of bread into the body of Christ we can still perceive it as bread due to the residual "surface" of the bread.

3) Analysis from anthropology. For Descartes, love of pure soul and love of passions are not distinguished, as in Thomas Aquinas, but are one and the same love inherent in the nature of the self as mind-body union.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：デカルト 自然本性 神 自己原因 類比 表面 情念 心身合一

## 1．研究開始当初の背景

研究代表者は博士論文の指導をデカルト研究の世界的権威である J-L. Marion 教授から、同教授の退官後は V. Carraud 教授からそれぞれ仰ぎ、デカルトを研究するための基本的取り組み方について、フランスの豊かな哲学的伝統に則った実り多い教示を受けた。その中で研究代表者が見出した問題点は、大きく分けて以下の二つである。神の考察を軸に据えた J-L. Marion の解釈はデカルト研究に革新をもたらし、V. Carraud や D. Arbib はそれを受けて発展させたが、彼らの仕事に共通するのは、デカルト形而上学のきわめて綿密な分析と、対照的に他の学問分野への目配りの相対的な少なさである。これは É. Gilson や H. Gouhier らが築いたフランスのデカルト研究の伝統を考えれば尤もではあるが、あまりに形而上学に偏った考察は、デカルトの企図と達成の体系的多様性を見失う危険がある。研究代表者は、デカルトの初期思想から一貫して見られる自然本性の考えに着目し、その形成過程の分析を博士論文のテーマとして選んだ。自然学研究については英米圏での研究が盛んだが、デカルトにとっての自然とは自然学に留まらない。特に、自然学を支える数学研究と認識論の根底にある自然本性の概念は、デカルト自然学研究を行う殆どの研究者が見過ごしている点、そして自然学の原理である「神または自然」（「第六省察」）概念を看過している点は大きな問題と捉えた。

これらの課題を解決するため、研究代表者は博士論文で初期デカルトの自然本性概念の形成過程を詳細に分析し、中期デカルトにおける本概念の発展については、2017 年度科研費・特別研究員奨励費での研究によって多方面から明らかにした。残された後期デカルトの哲学体系における自然本性概念の達成の分析と、それによって開かれた問題点の地平を考察するために本研究が位置づけられた。

## 2．研究の目的

本研究は、形而上学・自然学・倫理学が交錯する自然本性思想の観点から、デカルト哲学を広義の自然哲学として再解釈し、自然本性思想における歴史的な位置づけの測定を目的とする。

研究代表者はこれまで、初期から中期（主に『省察』迄）のデカルト哲学における自然本性思想の形成と展開を明らかにしたが（2017 年度科研費・特別研究員奨励費）、『哲学原理』『情念論』を中心とする後期思想の分析が今後の課題として残された。世界的に見ても、自然本性思想に焦点を絞ったデカルト研究は稀であり、さらに初期の認識論から後期の自然学・形而上学・道徳論までを含む、一貫的かつ分野横断的な観点からの研究はほぼ未出と言える状況である。

この課題に応えるべく、本研究は後期デカルトの自然本性思想を多面的に精査することで、その頂点に到達した総合的な自然本性哲学としてのデカルト思想体系の革新性と、その哲学史的な意義の解明をめざすものである。

## 3．研究の方法

本研究は以下の手順に沿い、後期デカルト哲学に通底して見出される問題意識とは何かについて、自然本性概念を軸にした解明をめざす。

### (1) 認識論からの考察

前期デカルトが生得的真理を基に抽出・使用していた、真理認識のための方法が後期デカルトにおいても見いだせるかどうかを確認のうえ、前期との異同を検討する。

特に、デカルト形而上学の一大頂点をなす神の自己原因概念の考察において、前期デカルトが用いていた類比という認識論的方法がどのように使われているか、その内容と意義、達成と課題を明らかにする。そのうえで、以後のデカルト哲学の認識論的方法に何か変化が生じたかどうか、生じたとすればいかなる変化なのかを検討する。

### (2) 神学と自然学が交わる問題からの考察

前期デカルトから引き続く自然学への注力に加え、後期デカルトでは神の問題が積極的に論じられることになる。自然学と神学に共通する聖体問題を検討することで、デカルトが自らの哲学の体系的な実効性をいかに証明しようとしたか、そしてそこに自然本性の問題がどのように関わり、いかなる意義をもつのかを解明する。

### (3) 人間の自然本性面からの考察

人間の本性を精確に把握し、情念に対処するための後期デカルトの取り組みを、主に『情念論』と書簡の分析から明らかにする。デカルトは情念の仕組みを自然学的に研究した結果、「第六省察」では否定的に語られた心身合一としての人間の本性の弱さが、『情念論』と晩年の書簡に至り、その本性とそこから生じる情念すべては(悪いものさえも)肯定的に語られることになった。この変化は何が原因で、その奥にはデカルトのいかなる倫理的主張が含まれているのかを解明するため愛の理論に着目し、これを詳細に分析することで、デカルトの人間学における自然本性概念の現れを考察する。

#### 4. 研究成果

(1) デカルトが自らの哲学の実効性を神学的考察の方面から明らかにするために採った認識論的方法がどのようなものであったかを、自己原因概念の検討によって解明した。

神の自己原因概念という哲学・神学史上の一大問題に対し、デカルトが若年から用いてきた類比という認識方法をなぜ、そしていかに適用したかに焦点を置き、考察した。類比は元来、若き哲学者が数学研究において真理発見のために用いていた、既知の事項から未知の事項を導き出すための方法であり、その意味で「分析」の核を成す認識方法である。これを『規則論』で一般的認識論の方法にまで昇華させた後、自然学研究では「比較」に姿を変えて応用したデカルトは、神の自己原因概念という、われわれの認識を超越した真理を読者に自らで発見させ、それによって読者の説得をめざすために類比を用いたこと、すなわち、デカルト神学の根幹を説明するため、分析と総合の方法が混在した論証として類比を用いたことを明らかにした。

(2) 後期デカルト哲学の展開について、形而上学・自然学・倫理学が交錯した問題を検討することで、デカルト晩年の自然本性概念の思索が一つの果実として結実していく様を析出した。

これを聖体秘蹟の問題において分析した。秘蹟後にパンの感覚的性質が残りつつ、キリストの身体がパンにおいて現前するという化体の問題を、デカルトは自らの「表面」理論によって自然学的な観点から説明しようと試みた。これによってデカルトは、化体という神学上の問題といえども、感覚という偶有的な問題に関する限り、すべて自然学的な観点から矛盾なく説明可能であること、すなわち、デカルト哲学の「人間的な論拠」によって信仰の問題が証明可能であることを示した。

一方で、化体そのものの発生はなぜ可能かという核心的な問題については課題が残った。これは一方でキリストの魂の神秘に関わる問題であるため、デカルトは以後沈黙を守ったが、他方で心身問題を含むものであり、後期デカルトの研究を方向づける一要因ともなった。

(3) 後期デカルト哲学における人間としての自然本性の考察は、ボヘミア王女エリザベトとの文通を経て『情念論』に結実する。『情念論』では人体の作用による魂の受動としての情念の理論が展開され、六つの基本的情念が挙げられる。本研究では愛の情念の独自性に着目し、自身の神学思想と人間学思想の一つの到達点として、人間の自然本性における愛の現れをデカルトが考察したとの仮説に基づき、デカルト研究の第一人者であるマリオンとカンブシュネルの分析を批判的に取り入れつつ考察した。

デカルトの愛理論の特徴は、アリストテレスやトマス・アクィナスとは異なり、愛を対象によって区別せず、「私」が善とみなすものとの結合をめざすことが愛の本質であると考えることにより、神の愛と人の愛を一義的に考察することを可能にした点にある。これに関し、マリオンはデカルトが他者への愛の理論によって『省察』の自我を超越したと述べ(慈愛による形而上学の「解任」)、カンブシュネルは神への知的な愛といえども情念の愛を必ず引き起こすデカルトの人間学的視点を強調した。これらの考察に対して本研究は、デカルトの自我は常に他者とともにあり、他者への愛は構造的に神と人間を包含していることがマリオンの分析には抜け落ちている点、また、心身合一を重視するカンブシュネルでは人間の情念としての愛のみが注目され、デカルトにとって本質的な愛は身体とは区別された精神的な愛であることがその考察に不足している点を指摘した。精神的な愛と情念としての愛はその発生構造上は区別されるものでありながら、「私」において矛盾なく共存し、一つの愛として現れる。デカルトは身体とその作用に独自の価値を認めることで情念としての愛に精神的な愛との本質的な区別をせず、どちらの愛も共に善であるという主張を通じ、「私」の自然本性そのものが善であることを裏づけていると本研究では結論した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 佐藤 真人	4. 巻 19
2. 論文標題 神学と人間学の交錯 デカルトの愛について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 法政哲学	6. 最初と最後の頁 13～25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 真人	4. 巻 73
2. 論文標題 信仰を支える人間的な論拠 デカルトの「表面」について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 255～270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11439/philosophy.2022.255	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 真人	4. 巻 26
2. 論文標題 デカルト形而上学の論証の方法 類比の考察を通じて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究	6. 最初と最後の頁 202～214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.51086/sfjp.26.0_202	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤真人	4. 巻 70
2. 論文標題 デカルトの「自然の教え」とは何か ストア派の自然本性概念との対比で	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 倫理学年報	6. 最初と最後の頁 105～118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32196/ethics.70.0_105	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐藤真人
2. 発表標題 神学と人間学の交錯 デカルトの愛について
3. 学会等名 法政哲学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐藤真人
2. 発表標題 信仰を支える人間的な論拠 デカルトの「表面」について
3. 学会等名 日本倫理学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------